

研究代表者 所属・職：健康科学部・講師

氏 名：橋本 圭央

研究課題名：再開発地域、および住区周縁部における都市活動の表記法

研究の概要

都市は物的構造と社会的構造によって構成される重層的な集合体として定義することができるが、近年では人間を取り囲む環境としての都市のあり方が重要視されるようになり、都市機能のうち特に社会的、心理的構造部分が大きな役割を果たすようになっている。またそこでの実際の形成・利用との関わりから、建築・都市空間を表象する媒体としての人の移動や活動、および空間を構成する要素などの表記は極めて本質的な問題であると言える。

一方で人の移動や活動、および空間を構成する要素などの表記は、その記述の多くが人の移動や活動を線・点状の軌跡として簡略化し、空間を構成する要素を省略化して表記することで、人間を取り囲む環境をあくまで物的構造に依拠する副次的なものとして捉える傾向にある。こうした傾向によって生まれるヒト、コトの定位したモノ化による質的・感覚的に捉えられる要素と定量的・物理的に表現されうる要素との間の断絶の問題は、建築のみならず多くの領域での近年の課題であると言える。そのため、課題を解決する手段のひとつとして、本研究では個人の身体感覚や人びとに共通の感覚・心理的事象に着目したうえで、建築・都市空間における通文化的な理解を可能とする表記法の確立を試みる。

本研究は対象地をイギリス・ロンドン中心部キングスクロス再開発地域としている。2005 年より始まり 2022 年現在までの長期間に渡り大都市中心部において継続されている再開発計画は国内を含めあまり事例がなく、様々なかたちで文脈化しつつも変遷する社会的、心理的構造の関係が見込まれる。また、研究協力者であるラングが専攻長を務めるロンドン芸術大学セントラルセントマーチン校は対象地域内に位置し、調査および研究成果のレビューを現地にておこなえる点も重要である。

本研究の具体的な方法については、日常の移動や活動における「参与的な出来事」を対象とし、それらの注釈的認知地図・スケッチを中心とする感覚的記述を中心とする。心理学において 1940 年代から用いられていた認知地図を建築・都市空間を捉える際の戦術として初めて適用したリンチは 5 年にも及ぶインタビュー調査をもとにボストン、ロサンゼルス、ジャージーシティ（アメリカ合衆国）における身体的に知覚しうる建築・都市空間の諸オブジェクトを「Path（道筋）」、「Edges（周縁・境界）」、「District（領域）」、「Node（結節）」、そして「Landmark（目印）」の五要素によって分類することで、捉えることの困難な様相・印象・記憶といったものを掴み取ろうとしていた。その後、認知地図を発展させたアップルヤードは、より空間的に様相・印象・記憶を捉える方法として「Annotative Cognitive Mapping（注釈的認知地図）」を確立する。白地の紙を参与者に渡して 5 つの要素を記入してもらっていたリンチに対し、写真・図面を用いて住民の反応を地図上に重ね合わせていく方法を採用することで、より集会的でありながらも一つの場の制約を表象する地図の視覚化に成功している。

様々な記述の過程においてそこでの表記の方法の確立は事前的に求められるものである一方で、特にその表記対象が物的要素のみならず心理的側面などを含む掴みどころのない様相・印象・記憶・情動に関わるもの、つまり建築・都市空間の質的側面に関与するものであればあるほど、そこでの表記の過程において顕在化される情報と不在になる情報は同義となる。そのため、質的本質を捉えようとする様々なノーテーションにおいて、事前・事後的な状況を補足する注釈的認知地図の組み合わせが重要となってく

ると考える。

達成状況・成果内容

イギリス・ロンドン中心部キングスクロス再開発地域は、ロンドン中心部ゾーン1北西部に位置し、セントパンクラス駅、キングスクロス駅という二つのターミナル駅による交通エリア、グーグルのロンドン支社などを中心とする商業エリア、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校を中心とする文化エリア、および2000住戸による住居エリアにより構成されている。2005年より再開発が始まり、50棟の新たな建築物、20通り、10箇所の公共広場、26エーカーの公共空間、1日に3万人の利用者、新たな郵便番号(N1C)を持ち、67エーカーの土地をもつ、2023年現在に至るまで再開発が継続する大都市圏域中心部ではあまり事例のない地域である。大都市中心部に位置し、継続して再開発が続くからこそ、キングスクロス再開発地域では様々なかたちで文脈化した都市の社会的、心理的構造の変遷に対して、以下の手順で調査をおこない、最終発表をロンドン芸術大学、および英国建築協会付属専門大学で教鞭をとる教員2名と複数名の実務家に対しておこなった。①認知地図作成：情報・印象をもとに参加学生6名は、「キングスクロス再開発地域」に対する認知地図を作成した。交通・商業・文化・住居エリア、および周縁部に対して印象による物理的な距離と心理的な距離の相違、印象を形成している物理的要素の抽出などを試みた(図1)。②注積的認知スケッチ作成：①で意識化されたエリアに関連する印象操作の過程に踏み込むために、一点・二点透視スケッチ、動線図をもとに人の振る舞いと印象、および物理的要素の構成を対象化した(図2)。③要素抽出：人の振る舞いと印象、および物理的要素の構成をもとに、視線・動線と印象操作の関係性を検証した(図3)。④都市のイメージの表記：要素の集成的関係や成り立ちを、振る舞いと並列的な表記をもとに検討した(図4)。⑤都市のイメージの再構成：都市のイメージの表記をもとに、それらの集成的関係を再構成のあり方について招聘教員とともに協議した。

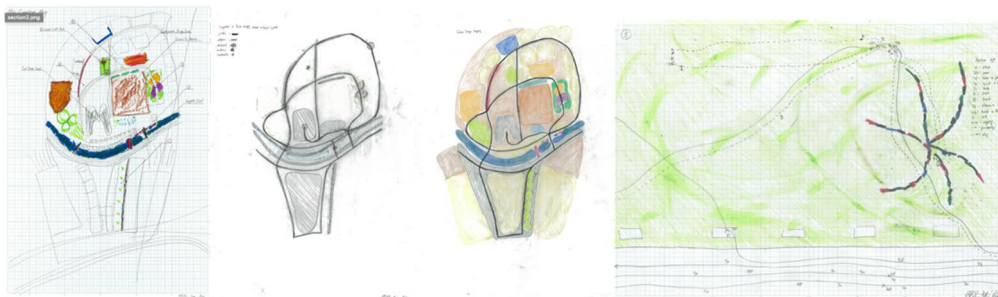


図1 認知地図例 (作成：前村真太郎)

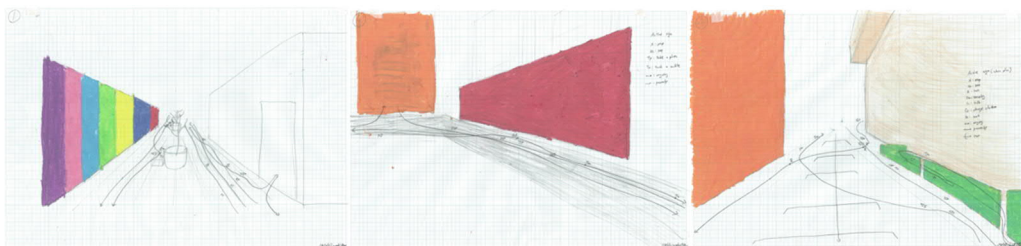


図2 注積的認知スケッチ例 (作成：前村真太郎)

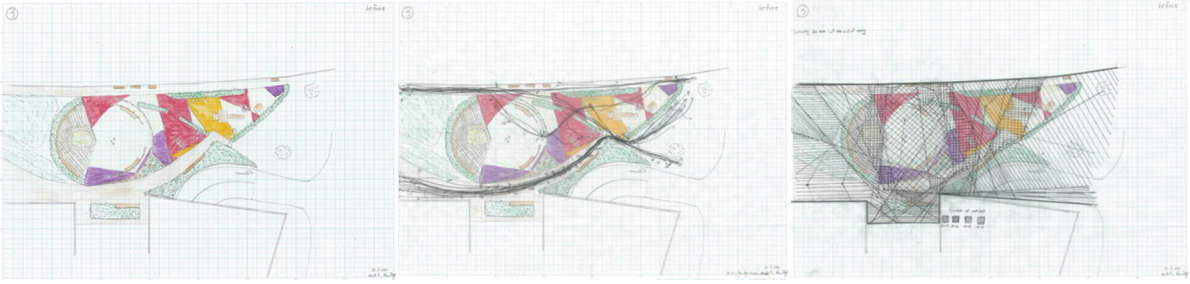


图 3

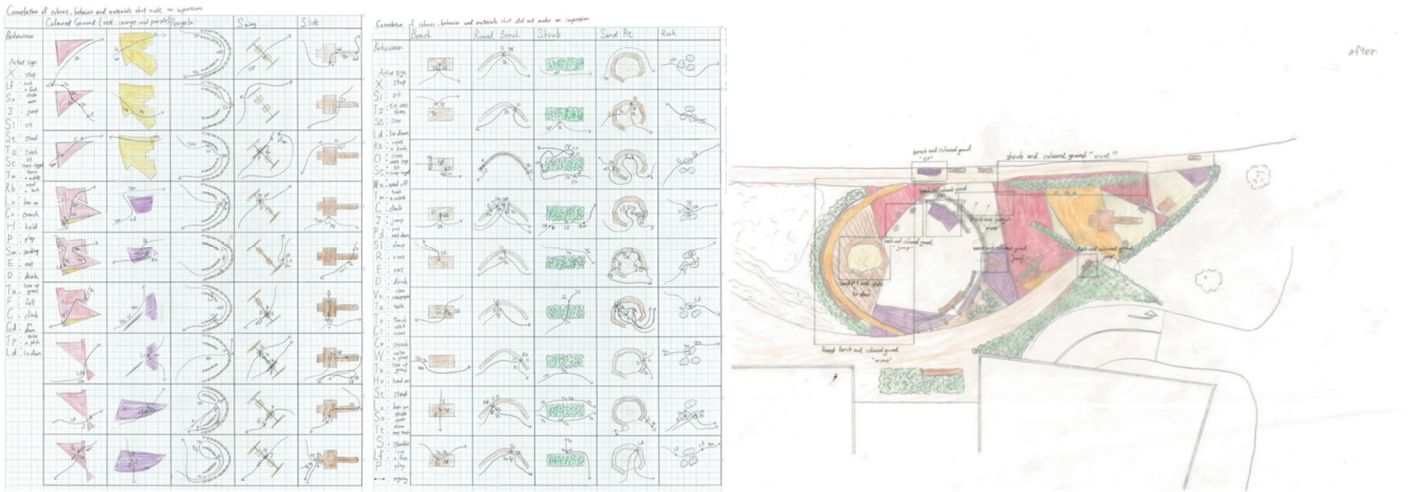


图 4 (左·中)、图 5 (右)